

T. Sato

ISSN 0389-7494

会誌

第 26 号

昭和 61 年 3 月

26

巻 頭 言 会長 小林貞作

研 究 発 表

- 1. 歯に関連ある孵化 Hatching, Eclosion。に就いて 坂下栄作
- 2. 厨房から出るごみに依存しないで繁殖する黒部・砺波
両青少年の家のスズメ (passer montanus) 大田保文
- 3. カミキリムシの訪花 田中忠次
- 4. 宇波川の植物について 中川定一
- 5. ゴヨウマツ, ヒメコマツ, キタゴヨウの学名と和名に
対する提案 本多啓七
- 6. 入善町負釣山の植生について 本瀬晴雄
- 7. 富山湾沿岸の海浜植物とその生態 本多省三
本多啓七

本 会 記 事

編 集 後 記

富山県生物学会

巻 頭 言

会長 小 林 貞 作

最近、世相を反映してか、何でも「緑化」とか「緑を守る」とか、自然保護を呼びかける声が、新聞・TVなどを通じて日ごとに高まっている。「緑化」は、別に今にはじまったことではない。狩猟採取の古代を除けば、人間の知恵ではじまった縄文や弥生時代のプレ農耕の栽培・飼育の段階で、すでに「緑を育てる」ことははじまったのである。つまり、これは古代の食生活文化のときから「緑の恩恵」は、百も承知していたと思える。

ところで近年どうしたことか、開発優先・都市化拡大といったバランスを失った変則経済のヒズミと上昇のみを追う政治・行政の結果、こんどは都市砂漠化進行・休耕廃（裸）地進行という姿が富みにひどくなった。そこであわてた為政者たちは、「自然保護」や「緑化」を呼びかけ、自分の人気を売りものにした。とんでもない話といわざるを得ない。

そこで、自然保護思想の植え付けは、教育にしかないのだ。成・壮年層では遅すぎる。どうしても、幼児・初等教育から、「人間生活」と「自然」、とくに「緑」の植物とのかかわりの重要性を教え込むことが大事である。そうでないと、自家の前の街路樹の落葉が邪魔で、切ってくれと市役所に苦情を言うような人間になるのだ。

生物教育の重要性は、直接の人間生活、そして人類福祉との向上に資することにあるのだから、会員諸氏は、それぞれ自前の腕の誇りをもって、さらに躍進されんことを強く希望したい。

ここに、会誌26号の発刊を祝するにあたり、本学会の一層の隆盛発展を心から願うものである。